10 月 1 日のメッセージ

聖書：ヤコブの手紙　2：　1－9

「人を分け隔てするなら」

先日、タイのチェンマイに行って驚いたことがあります。それは、タイの通貨であるバーツの価値が、日本円に対してずいぶん高くなっていたこと。今から 10 年前、1 万円で 3200 バーツに交換できました。ところが、今回は 2300 バーツ。実に、900 バーツの差があります。1 バーツ当たりで考えれば 3.1 円と 4.3 円。この 10 年間で 1.4 倍になっていました。もちろん、タイの経済力が上がったこともあるでしょうが、それ以上に日本経済の落ち込みを実感しました。

全体的に沈みかけているように見える日本社会にあって、貧富の差はますます拡大しているように思われます。インターネットを通じて、各地の子ども食堂やフードドライブの様子を知ることができるのですが、コロナ禍も相まって利用者は右肩上がりになっています。

ところが、不思議なことに利用者が増えると「タダで得をしている」と足を引っ張ろうとする者も増えるのです。自分も苦しんでいるはずの者が、さらに苦しんでいる者を非難するという悲しい現実があります。自分だけは助かりたいとでも思っているのでしょうか。しかし、それは結果として皆が苦しむ社会を助長することになってしまうにもかかわらず、です(「お前たちは災いの日を遠ざけようとして／不法による支配を引き寄せている。」アモス書 6:3)。

ヤコブの手紙が宛てられている教会でも、そのような現実があったのではないでしょうか。現状の苦しみを少しでも逃れたいと、地上で栄華を誇る者たちにすり寄るような生き方を選ぶ者たちがいたのではないでしょうか(「あなたがたの集まりに、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来、また、汚らしい服装の貧しい人も入って来るとします。その立派な身なりの人に特別に目を留めて、『あなたは、こちらの席にお掛けください』と言い、貧しい人には、『あなたは、そこに立っているか、わたしの足もとに座るかしていなさい』と言うなら、……」ヤコブの手紙 2:2-3)。

真に頼るべき方である神を見ようとせず、「今、この瞬間」だけを満たすものに頼る姿勢を、イエスは「金持ちとラザロ」のたとえによって喝破されます(「ある金持ちが……毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。……やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。……アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』」ルカによる福音書 16:19-31)。

詩人もまた、地上での生き方がそのまま神との関係につながっていることを教えてくれています(「地上であなたを愛していなければ／天で誰がわたしを助けてくれようか。」詩編 73:25)。

人間が真に求めるべき幸福とは、自分一人だけが満たされることではありません。神が造られ、その全てをご覧になって「極めて良かった」(「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」創世記 1:31)と言われたこの世界を、神と共によりよいものに作り上げていくことこそ、私たちが目指す幸福です。

その働きによって私たちは、イエスが、神が命じられた「隣人を自分のように愛しなさい」との言葉を実現していくことになるでしょう(「もしあなたがたが、聖書に従って、『隣人を自分のように愛しなさい』という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。」ヤコブの手紙 2:8)。

「しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違犯者と断定されます。」(ヤコブの手紙 2:9)

改めて自分の手の業を吟味したいと思います。私の手は「自分一人の幸福」だけを目指してしまってはいないでしょうか。一時の不満を解消するために、隣人の足を引っ張ってはいないでしょうか。

隣人のために、隣人と共に、何よりも神と共に、この世界をますます幸福で満たして参りましょう。